1971年6月17日　第3種郵便認可　毎月6回(0の日・5の日)発行　2008年3月26日発行　SSKP　通巻第3772号

自立生活センター・小平　通信

生活を豊かに彩る「ゆにーく　ゆあ　らいふ！」　SSKP

ゆにーく your らいふ

2008年
3月号

［表紙写真］ピア・カウンセリング集中講座
（2007年11月開催）

好評連載中

■ぶっちゃんの子育て奮闘記
■田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン
■ピア・カウンセリングと私
■かあかとＣＩＬ

【報告】
ピア・カウンセリング公開講座
クリスマス会
障害者の権利を考えるセミナー
知的障害者自立生活体験事業研修会

1971年6月17日　第3種郵便認可　毎月6回(0の日・5の日)発行　2008年3月26日発行　SSKP　通巻第3772号

目　次

2008年
3月号

自立生活センター・小平　通信　SSKP

ゆにーく your ちいふ

連　載
p　3　ぶっちゃんの子育て奮闘記②
p　4　田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン②
p　5　ピア・カウンセリングと私②
p　6　かあかとＣＩＬ

NEW FACE 紹介
p　8　淺川　都さん
p　9　根本　真由子さん

報　告
p１０　クリスマス会
p１１　バス会社との交渉報告
p１２　ピア・カウンセリング公開講座
p１３　障害者の権利を考えるセミナー
p１４　知的障害者自立生活体験事業研修会

p１５　活動報告
p１７　編集後記・地図
p１８　サービスのご案内

■ぶっちゃんの子育て奮闘記②

片山由理子

～　成人扱い？？　～

高校を卒業して、成人扱いになり児童施設から、埼玉療護園という成人の施設に入りました。想像は成人扱いになるのだから、整育園より生活も多少自由になるのかなぁと思っていました。例えば外出や飲酒や喫煙を自由に出来るのかと楽しみにしていました。（笑）しかし、理想と現実は違い最悪でした。

整育園には１日の流れにメリハリがあって、朝起き、食事をし、学校へ行き、帰ってきてからもリハビリをするなど色々やることがあったけれど、成人になると学校もないし、やる事もなく、やりたい事があっても職員の手が足りないので、出来ない日々でボケーっとしていました。できることと言ったら、テレビを見たり、そこに入っている人たちと話をしたりするしかありませんでした。外出などもそこの園では家族が連れて行くか外出許可証があり、それを家族に書いてもらって園長の許可を貰うという変な規則があって１８歳で入所した私には、苦痛だったし話し相手も自分よりかなり年配の人が多かったのでおばちゃん相手に話をするにもネタがなく、孤立してテレビを見るかマンガを読むしかありませんでした。本来なら家にいれば、自由な服装で出かけたり出来るのだから、成人の施設でも好きな時にオシャレをして出掛けたり、二十歳過ぎてるんだからお酒など飲ませてくれてもいいのにと思っていました。これじゃあ子供並みの扱いだぁと怒りを抱いていました。

あるときふと、「このまま、ここにいて死んじゃうのかなぁ」と思ったら、だんだんストレスが溜まり、結局何だったのか未だにわからないのだけれど…多分ノイローゼ気味？すごく頭痛がするようになってしまいました。痛みが我慢しきれず仕方なくお父さんに精神科に連れて行ってもらいました。安定剤をだされ、「今の環境が悪いのではないか」と医者に言われ、お父さんが１～２ヶ月家で看てくれました。私も精神的に落ち着き、お父さんの大変さを見て、また戻るのもいやだったけれど、私とお父さんの間で決まりを作って、週末は必ず帰ること、盆正月は１週間以上家にいさせる事を条件に戻りました。しかしやはり、約束は破られ、だんだん帰省する日が短くなって、毎週のはずが隔週になり、最後には面会だけになってしまいました。

でも、職員が増えるわけでもなく、環境が変わるわけでもなかったので、またストレスが溜まり療護園が嫌になりここを出たいなぁと思うようになりました。その事を、お父さんにぼやいたところ、お父さんは定年になったら出してやると訳の分からない事を言って「それって、定年した後、私のかかえとかできる？」と話しました。

そうした頃に、養護学校へ一緒に通っていた学年は１つ下の友人が、グッドライフで働いていて、「もう出たいんだよねぇ」と、話していたら「東京なら由理子くらいの障害でも自立できるよ」と言ってくれました。色々話を聞いて制度の事とかを勉強し、お父さんに話をしたら「そんなうまい話があるわけない」

とか「誰が面倒見るんだ？」「２４時間ずっと付きっきりじゃないだろ？」とか言われてしまいました。「その子はお前より動けるから一人暮らしができるんだろ？」と、最初言われて「違うよ」と言い張って、「自立生活プログラムだけでいいから受けさせて」と言ったところ、お父さんが「じゃあ勉強がてらいいんじゃない？」と言ってくれて、とりあえず自立生活プログラムだけ受けさせてもらいました。

毎回やった事をお父さんに話し、資料も見せて、「私くらいの障害の人もいたよ」と言ったら、「ふう～ん」と、全然取り合ってくれませんでした。でも、私の意志は療護園を出て、自立すると決心していたから、宿泊プログラムを受けて、実際やってみて出来ると確信したので、お父さんに「私がね、ずっとここにいてお父さんがずっと面倒看られるの？」「お父さんが死んだらどうするの？」「親子の縁を切ってでもいいから、ここから出してくれ」と言って、お父さんも「お前がそこまで言うんだったら、もう帰ってくるなよ」って渋々ながら「うん、わかった」と、１０年半にわたる施設生活にピリオドを打つことができました。　**（次号　～　独り暮らしを始める　～　に続く）**

■田無タワー　オカンとボクと、時々、オトン②

落合勇平

このタイトルちょっとばかしわかりづらく、タイムリーではありませんが、このまま続けさせてもらいます。前号からの続きということですが、ここでは自立生活にいたるまでの親との関係や葛藤などなど書いていくつもりです。

前号では親元を離れて生活するまでは、普段着る物のほとんどが母チョイスでしたという話をしました。親元での生活を想い返してみますと、生活の大半が自分主体ではなかったと思います。普段学校にいる時や友達とどこかへ遊びに行く以外は、ほぼ家にいましたし、その間のほとんどが家族介護でした。家族介護が主な生活では、お互いの都合を融通しあいながら、生活を送らなければなりません。母が外出する用事があれば、父が介護をします。父もいなければ妹が家に残って介護をしなければなりません。父と妹がいなければ、母のための外出に私もついていかなければなりません。また逆に私のための外出に母もついていかなければなりません。私が小さかった頃までは、こういった生活はできていました。けれど、だんだんと自己が強くなっていく年頃になると、親と一緒にでかけるのが嫌になってきました。家族介護が中心の生活である以上、それは避けて通れませんでした。

避けて通れないとあきらめ我慢し続けていると、その生活が当たり前になってきていました。気持ちが内向的になって、なんでもあきらめ、周りとの関係に興味を失っていきました。そうなると自分が周囲からどう見られるか、自分はどう見られたいかなどどうでもよくなっていました。なんでもいいや・・・と、自分がどうしたいかと積極的に気持ちを表現することすら億劫でした。

そんな私が徐々に変わり始める・・・のはまた次号へ続きます。

■ピア・カウンセリングと私②

久保田さおり

前回からピアカウンセリングについて書かせていただいていますが、今回はピアカウンセリングの中での、感情の解放ということを書きたいと思います。感情とは、嬉しい、怒る、喜ぶ、悲しむ、憎い、うらやましい、などですがその感情に伴って体に現れる反応、泣く、笑う、怒る、震える、あくびをする、ということが感情を解放するということです。感情の解放のなかでも特に、泣く、怒る、ということは体の防衛反応で、とても必要なことです。泣いた後なぜかすっきりしたという経験ありませんか？すごくつらいことがあったときに、泣いたり怒ったりするのをがまんしてためていってしまうと、同じような場面になったとき、拒否反応がでてしまいます。例えば、つらいことをお医者さんに言われてすごく傷ついたとします。お医者さんをみるとそのときのことを思い出して、お医者さんはみんな自分を傷つける人だから会いたくないと思ってしまいます。お医者さんにもいろんな人がいます。その人はその中の一人であって、すべての人が自分を傷つけるわけではないということが考えられなくなります。心の中に悲しかった気持ちがすごく残っているからです。人は特に悲しいことがあると、その感情が考えることを邪魔します。だから、ピアカウンセリングのなかでは気持ちを出して消化して、自分がどうしたいのか、これからどういうふうになりたいのか、考えられるように手助けします。

特に障害を持っていると社会の中で生きてくる中で、傷つくことが多いと思います。心の中に悲しかった気持ちがたくさんあって、そのせいで苦手な人がたくさんいたり人を信じられないということがあるのではないでしょうか。だからピアカウンセリングが障害者に特に必要で、広がったのではないかなと私は思います。

でも、泣いたり怒ったりの感情を出すことは社会のなかではあまりいいこととはされていません。だから感情を出しましょうといわれても戸惑ってしまいます。私もピアカウンセリングを初めて受けたとき、とても戸惑いました。でも少しずつ話していくうちに、感情があふれてきたことを覚えています。話した後、なぜか頭の中がすっきりしていました。みなさんは日常生活の中で、つらいことがあったときに、誰かに話を聞いてほしい、と思ったことはありませんか？聞いてもらっただけで楽になったということはありませんか？
話すうちに涙が出てきて、話し終わったあと気持ちが軽くなったことはありませんか？ピアカウンセリングって普段していることの延長で、誰でもできるのではないかなあと私は思います。

■かあかとＣＩＬ

コーディネーター　岡村千重子

生後8ヶ月から保育園に通い始めた娘も、3歳7ヶ月になりました。最初の1年間は、保育園に応募したものの抽選にもれ、いわゆる「無認可」と言われる保育所ですごしました。1年後、今度は無事認可園に入ることができ、そこでの生活も2年が過ぎようとしています。

保育園の種類について簡単に説明すると、保育園の設置や運営について国（厚生労働省）が定めた基準があり、それを満たしているのが「認可園」ということになります。それを満たしていないものを、国が認可していないということで「無認可」と呼ぶわけです。認可園に入園が決まった時には、「良かったね、認可園の方が色んな面でやっぱりいいよ」という話をたくさん聞きました。

「無認可」の場合、ほとんどの保育所が０～２歳児までしか受け入れがありません。認可園に入園出来たことで、とりあえず小学校にあがるまでは「子供をどこに預けよう･･･」という心配がなくなりました。その点ではとてもほっとしたし「良かった」の一言です。でも実際、基本的な保育という点においては、今のところ、格別に良いと思うことがあまりありません。誤解のないようにさらに言うならば、どちらにも良いと思うところ、残念なところがあると感じるのが正直なところです。

どちらも良いという点について言えば、「無認可」は充分な広さの園庭がありませんでしたが、その分毎日近所の公園や山にお散歩に行っていました。それは認可園で過ごしている今と変わりません。また、給食も「無認可」でも認可園の献立を参考に、ほぼ同じ管理の下で提供されていました。「食べる」ということは、人生をスタートさせてまだ間もない娘に対し、大事にしてやりたいこと思うことの一つですが、その点でも今も昔も大きな不満はありません。３歳児以降の心配と、保育料の高ささえなければ（「無認可」は総じて保育料が高いのです･･･）、ずっと最初の「無認可」の保育所でも良かったと、今でも思うくらいです。基本的なところでは、そう違いを感じません。どちらも、子供に向き合って下さっていると感じています。

今回特に「無認可」の「良いと思うところ」をあげるとすれば、一つには「ほどよい規模」というのがあげられます。小さな借家を 3 件借りて、棟ごとに０歳児から２歳児までに分かれていましたが、完全に切り分けられているのではなく、大きい子も小さい子も元気にたくましく混ざり合っていました。まるで兄弟姉妹のように上の子が下の子をかわいがる場面も見られ、「こんな中で育てられるのっていいな」と素直に感じたものです。

規模が小さいから、園長のＨ先生と私との距離が比較的近かったことも大きいです。とても好感の持てる、穏やかな方で、送り迎えのときにはたいていそこにいて対応して下さいました。先生との会話は、何気ない、他愛ないものが多かったですが、人柄はそういうところにこそ表れるように思います。また、組織はそれを引っ張る人によって様子が違ってくるようにも思います。私は、

Ｈ先生とのやり取りを通して、この保育所のめざすものを感じとることが出来たし、それが安心や期待につながっていました。私の価値観に近いものが、そこにあったような気がします。

「無認可」の保育所でも、思うことが全くなかった訳ではありません。ある先生の対応が前々から気になっていて、ある時ついにその先生にきついことを言われました。圧倒されて反論も出来ず、家に帰って泣きました。何も言えなかった悔やしさに泣きました。私はそのことをＨ先生に話をしようかどうか考えましたが、結局それはしませんでした。娘の直接の担任でなかったのと、あと 2 ヶ月ほどで認可園への転園が決まっていたというのも正直あったかもしれません。ただ、一つ言えることは「どうせ言ってもしょうがない」と思ったから言わなかったのではない、ということです。「Ｈ先生に話を聞いてほしい」、そう思える人がいたこと、それだけで、なんとなく救われてしまったのだと思います。その後、何度かそのことについて話をしたいと思うことがありましたが結局同じ理由でしなかったし、卒園するまでのその後、いやな思いを引きずることもありませんでした。それは、「期待」が持てたからだと思います。「話を聞いてもらえるだろう。話をしたら、きっと理解しあえるだろう」という期待を。

この出来事を思い出すとき、私はコーディネーターという自分の立場を考えさせられます。相談を受けて話をしていても、「こんな話で終わっていいのだろうか？目の前にいるこの人は、これで気持ちが軽くなったのだろうか？」と思うことも少なくありません。私たちコーディネーターは問題が起きたとしても、基本的にまずは当事者の話を聞き、当事者同士で解決できるようにサポートするという立場にあります。それは、ＣＩＬの理念の下で、意識的にやっていることだとはいえ、ただ話をきくだけに終始していないかという不安がいつもつきまといます。また、自分が相談する側の身になって、相談しようとする時の一歩がなかなか踏み出せない･･･その気持ちを以前よりも深く理解できます。だからこそ、何かを抱えている人がその一歩を踏み出せないとしても、それがあきらめでなく、「話を聞いてもらえるだろう。話をしたら、きっと理解しあえるだろう」という期待の中にあってほしいと願っています。

その願いが願いだけに終わるかどうか、それは結局、普段の私のふるまいがどうなのか、どうしでもそこに突き当たります。何をしてもそうですが、つまるところはそこで、なかなか落ち込みますね、コーディネーターの仕事って。ただ、「自分はどうなのか？」を考える時に「あの人ならどうするだろう？あの人はどう考えるだろう？」とふと顔の浮かぶ人が、私には何人もいます。それは幸せなことだと思います。その人たちをそっくり真似るつもりではありません。でも、深く考えさせられます。例えばＨ先生。特別に深いお付き合いをした訳でもない、ぱっと見どこにでもいるようなおばちゃん、飛びぬけたセンスやカリスマ性を感じさせるわけでもない･･･そんなＨ先生の何に、どんなところに、私はそう思えたのだろう？Ｈ先生の何に「安心」し、「期待」できたのだろう？と。

■NEW FACE 紹介　～浅川都さん～

自己紹介をさせていただきます、浅川都(みやこ)と申します。
障害は、頸髄損傷で、平成3年 1991年に交通事故に遭い頸損になりました。
出身は、埼玉県の秩父市です。秩父夜祭や芝桜などのポスターが、西武鉄道の駅に貼ってあるので、ご存知の方も多いかと思います。電車で、西武池袋線の終点、西武秩父駅です。また、秩父鉄道という私鉄も通っています。

2006年12月に中野区に引越し、自立生活を始めました。新生活早々、体調を崩してしまい、春頃までずっとベッドで生活しておりましたが、お蔭様で回復し、元気を取り戻すことが出来ました。その頃、色々なことが重なって起こり大変だったけど、職員、介助者の皆さんに支えてもらった事を、とても感謝しています。

私が、CIL小平と出会ったのは、2005年6月頃です。当時、実家で両親、弟、犬、猫と暮らしていました。私の介護は、母一人に頼っている状態でした。母が元気なうちに、自立して介護生活から解放させたい、一人で生活し安心してもらいたい、という気持でした。自立生活をしたいといざ思っても、何から始めたら良いものかと、自立生活をしている友人知人に聞いたり、知らない人にメールしたり、友人宅を訪ねたりと一人もがいていました。

そんな中で、CIL小平に「プログラムを受けたいんです」と電話し、川元さんに相談をしたのがきっかけでした。それまで、障害者になってから一度も車椅子で電車に乗った事が無かったので不安でしたが、一人で電車に乗って小平へ勉強に通いました。母も、心配と不安でいっぱいだったと思うけど、何も言わずに応援してくれました。今も変わらず応援し続けてくれています。家族との関係も、同居していた頃より、良くなっている気がします。色々な人達に、支えて貰いながら今の生活を送る事が出来ています。声をあげれば、助けてくれる人達がいるという事を、沢山の障害者に知ってほしいし、障害者自立生活センターの存在は物凄く大きいと思います。

今、自立生活をしてみて、本当に良かったと思っています。これから、自立生活をしたいと思っている人に、自分の経験を伝えられたらいいなと思っていますので、色んな事を学んでいきたいと思います。頑張って勉強しますので、どうぞよろしくお願い致します。

■NEW FACE 紹介　～根本真由子さん～

はじめまして、根本　真由子です。まずは自己紹介からいきます。
昭和５９年８月２８日生まれの２３歳で、出身は福島県の太平洋側です。血液型は変人が多いAB型です。どんな環境で育ったかというと、海と山に囲まれた大自然で育ちました。中学３年生まで友達と川で泳いでいましたし、電車なんて１時間に１本あるかないかで、なぜか１４時台の電車はありません。こういう環境で育ったので、長く待っても５分の山手線にダッシュで乗り込む姿が何とも信じられなかったですね。「一旦落ち着いて！！」って思っていました。

若干引かれるくらいのお笑い好きで、家のHDDの中身はお笑いで埋まっています。ＤＶＤを集めていたりもしますが、やっぱり「元気が出るテレビ」は最高ですね！！特に好きだったのはエンペラー吉田ですね。あの人がジェット波越と震度７の地震体験をしたときなんかは笑いを超えて泣きましたね！！最近笑ってない方にお勧めします。

お笑い以外だと、滝を見にいったり、友達とはとバスツアーに出掛けたりするのが好きです。はとバスは、このツアーに参加しなかったら絶対に行かない所に連れて行ってくれるので、テンションが上がってしまい、皇居前とかで鬼ごっことかやってしまいます。普通の鬼ごっこより数倍楽しいですよ！
性格はもの凄く人見知りの赤面症で、慣れない人とのコミュニケーションが上手く取れないので、どんどん話し掛けてもらえると助かります。

私はCILで働きはじめて５月で３年になるんですが、面接を受けに来たときは全く仕事の内容や、方針を知らなかったので、介護職特有のパステルカラーのポロシャツを着て、エプロンなんかしちゃうんだろうな～、なんて想像をふくらましていました。実際ヘルパーの研修で行った所はみんなパステルカラーのポロシャツを着ていたんですよ、はい。でも、事務所に面接を受けに来たら、介護者は私服でエプロンもしてないことに、まずは明るい気持ちになりました。あれは介護するほうもされるほうも恥ずかしいはずです！きっと。
それから同性介護と指示介護という事に驚きました。これもヘルパーの研修でのできごとになりますが、当日いきなり「今日は勉強しに来ているこの子に介護手伝ってもらいます。」とか言われて、嫌だとも言えずに、男女関係無く着替えや排泄介助、入浴介助をやられている姿を見た後だったので、余計に驚きま

した。男性はどうか分かりませんが、女性はやっぱりいつまでたっても女性でありたいものだと思うので、男性に排泄介助や入浴介助をされるのは苦痛でしかないと思います。自分と置き換えてもやっぱり耐えられないと思います。こういうことを普通にやっている所が圧倒的に多い中で、奇跡的にこの事務所と出会えて本当によかったな～と改めて思っています。日々テンパッている私ですが、なにとぞよろしくお願いします。

■クリスマス会報告

山嵜涼子

毎年恒例のクリスマス会を行いました。今年は拾広くなった会場で飾り付けの用意をしていましたらナント飾りが足りない？？いつもはキラキラでいっぱいの会場を用意できていたのにぃ～^^;

毎年会場が狭い狭いとぼやいていた私でしたが、待ちに待った広い会場は予期せ出来事があるものですね！参加者の方々に喜んで頂きたくてこつこつ溜めていた飾りが足りないなんて、嬉しいような悲しいようなそんな始まりでした。でも、料理のほうは私たちのセンターで人気の高い鶏肉料理です。
ミネストローネとパン、ケーキも♪もちろんプレゼント交換もやりました。

皆楽しかったかな？なんて、会場を片付けながら思っていました。毎年恒例の行事は気を付けなければ前年と同じ物になってしまいがちです。そうならないためには私たちスタッフの打ち合わせは欠かせないことですが、一年最後の行事となると身も引き締まるし、参加者の皆さんと仕事を忘れつい楽しんでしまいます。

来年はキラキラの飾りをたくさん用意して、カワイイ会場にしたいなぁ～と今から待ち遠しい今年のクリスマス・・・・・・・

会の終わりに毎月やっている食事会の料理のこと、「皆、来年の食事会はどんな物が食べたい？」と聞きましたら「鍋！カニ！松坂牛！」との要望。私も食べたい！！と答えていたさなか「いつもおいしいからなんでも良いよ！楽しみにしているから」と言う声がありました。嬉しかったな本当に嬉しかったです。毎月スタッフで利用者さんの栄養と旬のものをと考えてもう４年が経ちました。そんな中に頂いた言葉だけに心にジーンときました。利用者さんていつも見ていてくれるんですよね、皆のことを・・・・・。仲間って暖かい。そう思える仲間の一員でいる私は幸せ者かもしれません。いつまでもいつまでも皆と一緒にクリスマスを過ごしたいと思いました。

※食事会・・・自立生活をしている障害者が月に一回集まって食事をしながら交流する会。

■バス会社との交渉報告

落合勇平

自立生活センター・小平で働き始めて２年くらい経ちますが、自宅から事務所までの交通手段としてバスをいつも利用しています。国内を移動する際に、障害を持っている方ならば一度は経験があるかもしれない体験を感じることができました。２年間でいろんなバス乗務員、乗客に遭遇しました。

まず多いのが、車椅子の利用客に対する接客態度の悪いバス乗務員です。スロープを出したり、車椅子スペースを広げる作業が面倒くさいのか、車椅子の利用客を乗せるのに時間がかかりダイヤが乱れるのが嫌なのか、とても面倒くさそうな表情をする乗務員がいます。ときには怒った表情をする乗務員までいます。またさらに接客をしているとは思えない言葉遣いなどが挙げられます。

ほかにいるのが、バスに車椅子の利用客を乗車させる手順をあまりわかっていない乗務員です。車椅子でバスに乗る際に使うスロープの使い方がわからない。例えば縦に設置するスロープを横に設置する。しまいには裏と表を間違えて設置してしまう。スロープの傾斜がきつい場合、バスの車体を傾ける（ニーリング機構）仕方がわからない。車椅子を固定するのに使う輪止めが車内のどこにあるかわからない。

乗務員がわからないことだらけですので、ますます時間がかかります。時間がかかったということで他の乗客から私にたいして、「早くしてくれないか」と苦情を言われたこともあります。

このようなことがある度に営業所へ苦情の電話をして、改善するようにと申し入れをしました。しかし、全く改善の兆しがありませんでした。そこで昨年これまでの苦情と改善点をまとめた要望書を提出しました。バス会社はこの要望書を受け、我々と話し合いました。こちらは乗務員研修をする際に、障害当事者を参加させるよう要望しました。バス会社はこちらの要望を受け入れ、今年の２月１５日障害当事者を参加させた乗務員研修が行なわれました。

数名の自立生活センター・小平の障害者スタッフが参加し、研修は１時間半に及びました。研修の中で、普段バスを利用していて感じている事、してもらいたくない事など我々の生の声を伝えました。電話や要望書だけでは我々の生の声は現場に浸透させることが難しいと感じました。まずはこれが障害当事者を参加させた乗務員研修の第一回目であり、今後も継続して乗務員研修をしていきたいと思います。障害者への理解が進む乗務員研修にするためにこちらが工夫する点、改善すべき点などを修正しながら取り組んでいきたいと思います。

■ピア・カウンセリング公開講座報告

竹島圭子

１０月１３日（土）１３：３０～１７：００まで花小金井南公民館にてピア・カウンセリング公開講座が六年ぶりに開催されました。公開講座は小平市周辺地域から視覚障害者１名身体障害者９名精神障害者２名健常者１０名、合計２２名の参加がありました。リーダー竹島、サブリーダー久保田で行いました。公開講座は障害者同士で行うピア・カウンセリングが、唯一健常者も受けられる講座です。

１３：００	受付開始
１３：３０	他己紹介
１４：３０	ピア・カウンセリングとは？
１５：００	休憩
１５：３０	ピア・カウンセリングの体験談
１６：００	ピア・カウンセリングの約束事
	セッション
	感想
１６：３０	受講した感想
１６：４５	代表挨拶・自立生活センターとは？
１６：５５	終わりの言葉

時間が足りず、ピア・カウンセリングのほんの一部しか紹介できませんでした。この講座でピア・カウンセリングを分かってもらうことは難しいと思いますが、興味を持った障害者は、色々な地域で行われる集中講座などに参加していただければと思います。また、健常者は再評価カウンセリングというピア・カウンセリングの元になった障害のあるなしを問わないカウンセリングを受けてみるのも良いかと思います。

福祉の分野でピア・カウンセリングという言葉が独り歩きしている感があります。健常者の中では何をしているのか分からない、何をしているのか想像が出来ないという疑問を持たれている方もいらっしゃるとおもいますが、ピア・カウンセリングの理論と実践を体験を通して知ってもらう良い機会が持てました。これからも、私たち障害者がエンパワーメント出来るピア・カウンセリングを地域に紹介していきたいと思いました。

1971年6月17日　第3種郵便認可　毎月6回(0の日・5の日)発行　2008年3月26日発行　SSKP　通巻第3772号

■障害者の権利を考えるセミナー報告

久保田さおり

２００７年１２月８日に障害者の権利を考えるセミナーを行いました。講師に弁護士の東俊裕氏をお招きし、「障害者の生活と権利条約」をテーマに講演していただきました。東さんは、ヒューマンネットワーク・熊本代表、全国自立生活センター協議会（ＪＩＬ）人権委員会委員長、日弁連・障害のある人に対する差別を禁止する法律に関する調査研究委員会委員をされ、障害者の権利や差別禁止について各地で講演活動をされている方です。

当日は、花小金井南公民館で、外部の方の参加もあり、１４時から１７時ぎりぎりまで講演していただきました。お話に熱が入り、質疑応答の時間がなくなるほどでした。

内容は、まず差別とは何かということ。例えば駅で車椅子利用者が混雑している時に切符を買って改札を通ろうとした時、駅員に「忙しいときに来ないで欲しい」と追い返されることがあります。この場合は他の乗客と違う扱いを受けて不利益を受けたのだから、あきらかに差別です。しかし改札は通すけれど他の乗客にサポートしないのと同様に、車椅子利用者にも手を貸さないといった場合は、今までは、同じ扱いであるので、差別とすることは難しかったのですが、条約では実際に障害者はこれによって不利益を被るので、同じ扱いでも「合理的配慮」を欠いたという点で差別であるということ。また条約とはどういうものか、私たちの生活と条約がどのように関係があるのか、ということを説明され、障害者が歴史的にどういう扱いをうけてきたか、日本の現状がどうか、これからどのような活動が必要か、など話していただきました。

私が印象に残ったのは、明らかに差別だということに対して裁判を起こしても、日本には差別を禁止する法律がないため負けてしまう、というお話でした。また、権利条約というものがあるということは知っていましたが、条約というものが具体的にどのようなものなのか、わからなかったので、知ることが出来てとてもよかったです。条約は、それだけでは拘束力は無く、条約にもとづいて法律が出来なければいけないということで、そのためには、当事者が声を上げなければならないということを話していただきました。

■知的障害者自立生活体験事業研修会報告

コーディネーター　高田貴志

去る１２月２６日、今年度行っている知的障害者自立生活体験事業（※）の一環として、自立生活をしている当事者の方からお話しを聞く研修会を行い、講師としてピープルファーストジャパン代表の小田島さんとその支援者の方をお呼びしました。

お話しは、自立生活をする以前のこと・なぜ自立生活をすることになったのかなど、色々なお話をしていただけました。その中で、強く心に残ったことが二つあります。

まず一つは、知的障害を持つことにより受ける特有の差別のことです。その差別とは、知的障害を持っているというだけで学校で起こった盗難事件の犯人にされてしまったり、仕事場ではまともな賃金をもらえなく過酷な労働を強いられ人間以下の扱いを受けていたりなど、信じられないことばかりでした。世間では、こういった話は今でも当たり前のようにあるようです。小田島さんが自立生活をするきっかけになった原因も、施設でこういった差別を受けていたことが一番の原因のようでした。

もう一つは、施設にいる方の自立生活へのサポートについて。施設にいる方の場合、自立生活をしたいと思っていても、本人が生活を送っている場が施設なので、周りからの反対が強く自分の意志を周りに言えないので、その意思を支援者側がくみ取っていくことはなかなか難しいようです。たとえ支援者と話をして自立生活への意思を伝えたとしても、施設へ戻ってしまえば周りのみんなは自立生活を反対しているので、生活を送る施設内では「一人」対「施設の人全員」といった形になってしまい、その意思を伝えていくこと・持ち続けることは難しいようです。実際に小田島さんも、ピープルファーストの人が自立しろと言っているから自立するといった感じで施設職員には伝えていたようです。自立したいという本人の意思をくみ取り、その意思を本人が周りに伝え、本人の気持ちが自立生活へ向かえるようにするためには、とにかく「本人のもとへ支援者が通うこと」このことが大切なようです。支援者の方は、施設にいる方への支援の場合、最低でも週に一回は通うことがとにかく大切と言っていました。

今回の研修会では、今後知的障害を持つ方への自立支援を行っていく中で大変勉強になりました。今後も研修会など行っていく予定ですので、また報告の機会あればと思っています。

（※）知的障害者自立生活体験事業とは

今年度自立生活センター・小平でおこなっている事業で、知的障害を持っている方に地域での自立生活を体験してもらい、地域での自立生活のイメージを本人やその家族に持ってもらうことを目的としています。研修会以外には、体験室での宿泊体験などを行っています。

《 活 動 報 告 》

２００７年１２月

３日（月）個別相談（川元）
　　訪問介護従業者２級養成研修（川元・馬場・岡村）
　　ピア・カウンセリング研修（久保田）
５日（水）忘年会会議
　　クリスマス会会議
　　コーディネーター会議
　　重度訪問介護従業者養成研修（岡村・田中）
６日（木）ピア・カンＩＬＰ会議
　　総務会議
７日（金）職員会議
　　報告検討会議
１１日（火）～１４日（金）
　　全国自薦登録ヘルパー推進協会中国・四国ブロック研修（川元・久保田・馬場）
１１日（火）重度訪問介護従業者養成研修（竹島・岡村・田中）
１２日（水）コーディネーター会議
　　重度訪問介護従業者養成研修（岡村・宮下）
１３日（木）ピア・カンＩＬＰ会議
１４日（金）忘年会会議
　　報告検討会議
１７日（月）クリスマス会準備
１８日（火）クリスマス会
１９日（水）コーディネーター会議
２０日（木）ピア・カンＩＬＰ会議
　　忘年会会議
２１日（金）報告検討会議
２５日（火）大掃除
２６日（水）知的障害者勉強会
２７日（木）忘年会準備
２８日（金）忘年会

２００８年１月

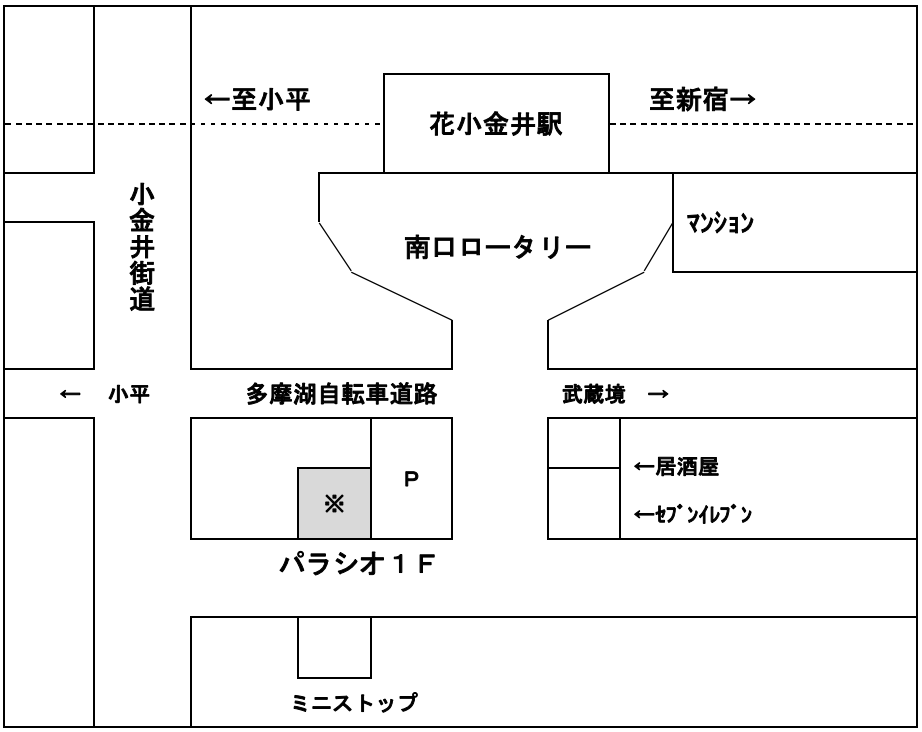
４日（金）報告検討会議
７日（月）重度訪問介護従業者養成研修（川元・田中・三澤）
８日（火）ピア・カンＩＬＰ会議
　　個別相談（川元）
９日（水）～１２日（金）
　　沖縄ＣＩＬ職員ＩＬＰ研修（竹島・小泉）
　　重度訪問介護従業者養成研修（伊藤）
　　コーディネーター会議
１０日（木）個別相談（川元）
　　総務会議
１５日（火）重度訪問介護従業者養成研修（竹島・岡村・田中）
　　全国障害者介護保障協議会電話会議（川元・久保田）
１６日（水）コーディネーター会議
　　個別相談（竹島）
１７日（木）ピア・カンＩＬＰ会議
　　西武鉄道交渉会議（山嵜・小泉・片山・久保田）
１８日（金）報告検討会議
　　ステップアップ研修打ち合わせ会議
　　杉並区交渉会議
２１日（月）～２４日（木）ＩＬＰリーダー養成集中講座／全国自薦登録ヘルパー推進協会（川元・小泉・竹島・山嵜・久保田）
２２日（火）個別訪問（川元）
２３日（水）個別訪問（川元）
　　コーディネーター会議
２５日（金）報告検討会議
２８日（月）ステップアップ研修２年未満（竹島・馬場・新井）
２９日（火）利用者交流会（新年会）
３０日（水）コーディネーター会議
　　知的障害者サポート会議
３１日（木）ピア・カンＩＬＰ会議
　　ステップアップ研修２年未満（川元・岡村）
　　交渉：杉並区（竹島・新井・中山）

■◆□◇■◆□◇■◆□◇　編集後記　■◆□◇■◆□◇■◆□◇

寒い冬も終わりやっと春が来ましたね。春といえばお花見ですね。花の下で食べて、飲んで、歌って大騒ぎするのは日本人ならではの風景だそうです。もともと貴族が楽しんでいた花見は梅が主流だったとか。桜の下でお酒を飲むのはお祓いの行事だったとか。由来はいろいろありますが、今は花よりだんごですね。でも後片付けは気をつけたいですね。

（編集長代理　久保田）

■自立生活センター・小平　地図



２４時間・３６５日介助派遣サービス

近隣の8市にまたがって身体障害者、知的障害者、精神障害者にサービスを提供しています。(初めてサービスを利用する場合は、利用規約等について事前に説明する場を設けさせていただきます。)

・自費利用　①知的・ガイドヘルプ　　￥１，４５０／時
　　②家事援助　　￥１，４５０／時
　　③日常生活支援　　￥１，５００／時
　　④身体介護　　￥１，８００／時
・ＩＬＰ、ピア・カウンセリング利用　ご相談ください。
・自立支援法によるヘルパー利用　　ご相談ください。

障害者生活支援事業サービス

◇介助制度、手当、住宅改造、生活保護などの制度利用の申請のサポートならびに生活に関わるあらゆる相談をお受けします。
・電話相談：３６５日、９時～２２時
・面接相談：月～金、１０時～１７時
◇ピア・カウンセリング（集中講座、個別）
◇自立生活プログラム（生活力、社会性を高めるプログラム）
長期プログラム、短期プログラム、個別プログラム、単発プログラム
プログラムテーマ例…障害って何？・介護を頼もう（介護者との関係）・制度学習・フィールドトリップ・お金の管理・調理実習　　…など
◇宿泊体験－民間のアパート（自立生活体験室）に泊まって、自立生活を体験するプログラムです。
◇自立生活をめざすための住宅サービス（アパート等の住居の確保）
◇広報誌の発行（制度や自立生活のノウハウに関する情報提供、情報交換）

各サービスを利用される方には、協力会費を頂いております。
入会ご希望の方は、下記までお問い合わせください。
会費：年額4,200円(年度途中から入会の場合月額350円)

《編集》**自立生活センター･小平**
〒187-0003　東京都小平市花小金井南町
1－26－30　パラシオ102
TEL/042-467-7235　FAX/042-467-7335
Ｅ－ＭＡＩＬ：cilkodaira3@hotmail.com

《発行所》
障害者団体定期刊行物協会
東京都世田谷区砧6-26-21
（定価　100円）